

港湾新聞

北東アジア政策懇話会 第3回研究フォーラム

9/25

NPO北東アジア輸送回廊ネットワークNEAN ETと(財)みなと総合研究財団は、みなと総研3Fで、9月25日(金)午後5時から、北東アジア政策懇話会・第3回研究フォーラムを開催した。根本康王みな

と総研業務執行理事が「昨今の中国経済の透明性が見えないお話もあると思いませんか」とあいさつをした。

続いて、町田一兵衛治大(学)商学部准教授が「『ユーラシア横断中国欧州輸送回廊』その整備と運営につい

て」と題して講演した。まず、「新シルクロードJ」に基づく国際交通インフラ整備について、習近平主席が2013年9月に中央アジア4カ国を訪問するなか、ヨーロッパまでの通路開拓に強い意欲を示してい

ることで、上海を踏まえた新シルクロード経済回廊の構築構想を説明し、上海協力機構の存在が背景にあることを述べた。交通においては「一带一路」であることや、早速動き出したチャイナ・ランドブリッジの利用状況、その必要性和実態を紹介した。さらに数年後には発地ごとに明暗が分かれると分析。成功するパートナーとして、成都、鄭州、連雲港を紹介し、さらに例外として重慶も挙げた。

現在の7本が、中国からヨーロッパまでは19本、中央アジアまでは15本になる展望を述べ、その先の自由貿易区との運動兼ねい込みについて解説した。

終わりに利用者へのメリットとして、迅速化の可能性(中国国内部分)、本数増や運賃下げなどの可能性、大口荷主に有利、カザフスタンの動き、ヨーロッパ側のフォワード企業も関心高、経由国の有力企業と資本提携で運行中のトラブルを最小限(重慶、成都)、国策としての位置づけで地方政府及び鉄道関連連行行政部門の後押し、高い中国の国際鉄道貨物の輸送ニーズ、とのわけ輸出の部分・さらに中国で事業を展開する日系製造業者の潜在需要を挙げ、「中国に進出した日系製造業は、第三国への輸出にほとんど鉄道を使っていない。今後、欧州向けの輸

出にチャイナ・ランドブリッジを活用したらどうだろうか」と町田氏は締めくくった。

その後、参加者へを交え、「一带一路構想とインフラ投資との関係はどうか。また、日本の港湾との関係において一带一路ルートと日本の港湾との接続の可能性はどうか」など具体的な質問が出て熱心な討論が行われた。

最後に吉田進NPO北東アジア輸送回廊ネットワーク会長が、「中国の西部の工業発展に伴い、西欧との連携が重要になってきて、そのロジスティクスは、陸上では、キルギスタン、ウズベキスタン、ロシア経由

ドイツへの一貫輸送として確立されました。「一带一路」政策は、そのルートにあっては追い風となりました。ひとつの輸送ルートが確立・継続しうるかどうかは運賃とリードタイムを計算した上で、有利かどうかで決まります。一带一路政策と中国ヨーロッパへの輸送ルートが、相互に依存・発展する関係であることが今日の講演で明らかになりました。今後の発展が楽しみです」と閉会の言葉を述べしめくくった。

韓国からの参加者もあり、各方面からの関心の高さを窺わせる懇話会であった。

◆町田一兵衛氏略歴
1970年中国上海出身
2003年明治大学大学院博士課程を修了、商学博士号取得、02年(株)日通総合研究所経済研究部に勤務、11年明治大学商学部専任講師「国際交通論」を担当、15年4月明治大学商学部准教授に現在に至る

◆第4回10月16日(金)講演
午後4時
講演者 東山茂北東アジアネットワーク理事
演題 「北東アジア交流白書(2015)」
◆問い合わせ
wavemaster@wave.o-ri.jp
neanet@oboc.orc.ne.jp



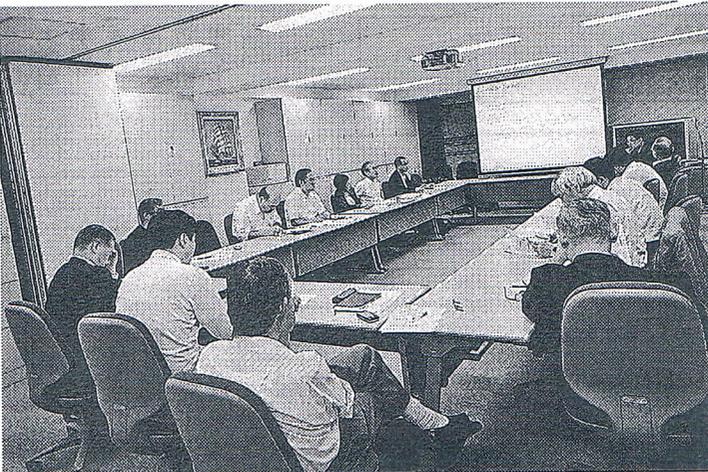
町田講師



根本みなと総研業務執行理事



吉田NPO北東アジア輸送回廊ネットワーク会長



第3回北東アジア政策懇話会研究フォーラムの様式